

今年の夏は、記録的な猛暑に見舞われ、9月に入ってもなお残暑厳しい季節が続いております。そんな中でも、市内では発掘調査を実施しており、ご協力いただいた市民の皆様には、この場を借りて御礼申し上げたいと思います。

さて今号では、かつて“城”が存在したと伝えられており、以前の発掘調査では中世の集落跡が発見された、“播磨田城遺跡”の調査成果と、埋文センター夏の恒例行事“親子考古学教室”の様様について紹介したいと思います。



図1 発掘調査位置図

● 発掘調査の成果 ●

はりまだじょう

播磨田城遺跡の調査成果

(1) 調査の概要と成果

播磨田町字宮前地先で、分譲住宅用地造成工事に伴い、約515㎡を対象に、平成22年6月24日から同年8月10日までの期間をもって発掘調査を実施しました。

調査対象地周辺では、隣接する地点で平成10年から11年にかけて発掘調査を実施しており、縄文時代～室町時代の遺構が見つかっています。その際に発見された、縄文時代晩期の土偶は、^{げいめんどぐう}“黥面土偶”と呼ばれる中部地方を中心に分布したもので、当時の地方間での交流を示す貴重な資料として注目されました。また、鎌倉時代から室町時代(14～15世紀)にかけての集落が見つかり、それらは幅3～4mほどの溝で区画された数ブロックの屋敷地により構成されている集落であることがわかり、中世集落の在り方を考える上で非常に重要な発見となりました⁽¹⁾。

今回の調査では、鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物・多数の溝を検出しました。まずは溝について、これらは規模により大小二つに区分できます。大きな溝は、幅3m・深さ1m以上の規模が



① 溝 S17 掘削状況

あり、それに該当するのは、S17・S33・S58・S180・S181・S202・203になります。これらの溝のいくつかは直進した後に直角に屈曲するという特徴を持っています。溝はいずれも調査対象範囲外に延伸するため、全景を見ることはできませんが、口の字状に巡り、屋敷地を区画する役割を果たした溝であったと想定されます。そして、仮にこれらで構成される区画を、図1のように屋敷地1・2と想定すると、各々約25m×約15mの屋敷地であったと推測できます。そして、その区画溝に付随するように、幅30cm程度の小規模の溝が、近接して延伸する状況を確認できました。

これらの溝からは信楽焼の播鉢すりばちや、土師皿はじさら、羽釜はがまや、中国製の陶磁器類など、日常雑器を中心に、天目茶碗てんもくぢゃわんなどの茶道具も出土しています。また、溝S17の最下層からは漆器椀の一部が見つっています。これらの遺物の年代はおおよそ13世紀代から15世紀代に至るまでのものが含まれており、出土点数が多かったのは14～15世紀代のものと考えられます。おそらくその時期が、この集落の最も栄えた時代だったのでしょう。

屋敷地2では、区画の内側に多くのピット群を検出でき、中には掘立柱建物SB-1(⑥)を構成する柱穴も含まれていました。建物の規模は、5間×4間以上で、床面積は約63㎡以上が想定できます。そして、建物の南東に位置する溝S56は、それに伴う“雨落ち溝”あまおみぞであった可能性があります。柱穴より出土した遺物の年代から、鎌倉時代(13世紀代)の建物跡と考えられます。ピット群の中には、土師器の皿や黒色土器碗が複数枚重なって出土する“土器埋納遺構”まいのういこう(②)も数箇所検出しています。当時の集落内における地鎮などの祭祀の在り方を考



② 土器埋納遺構 S137



③ 溝 S17



④ 溝 S33



⑤ 溝 S180・181

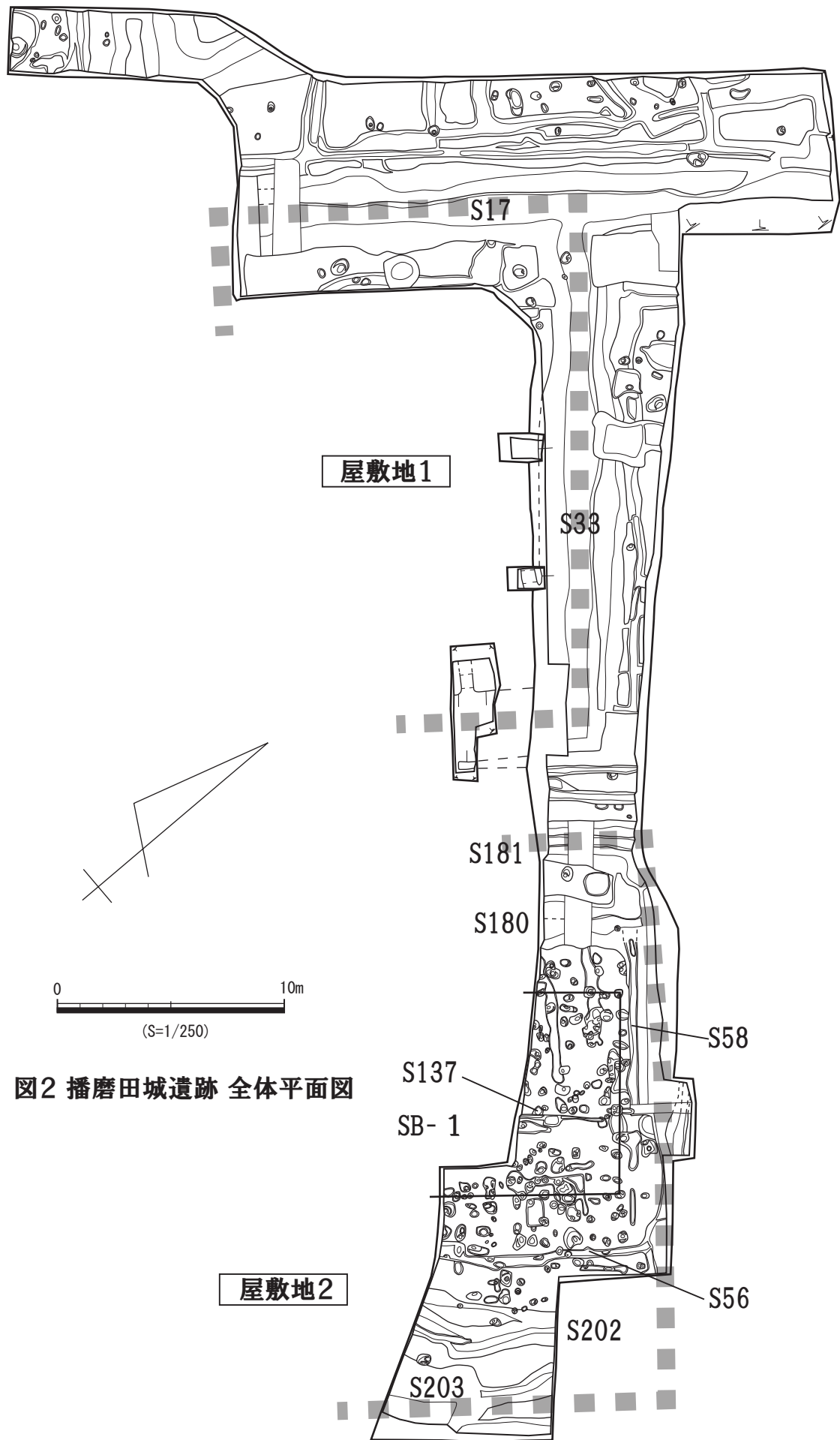
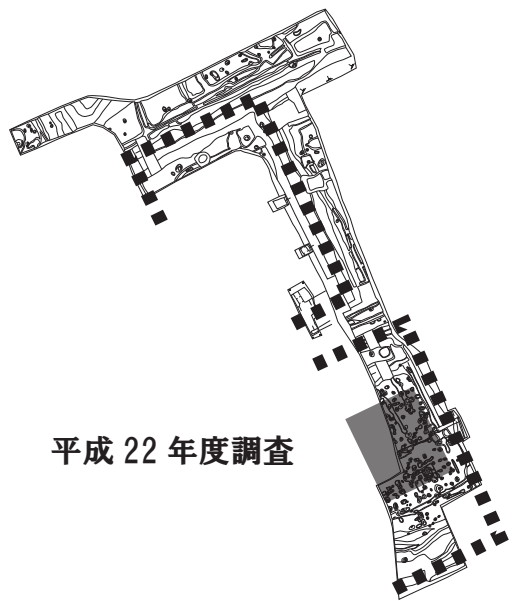
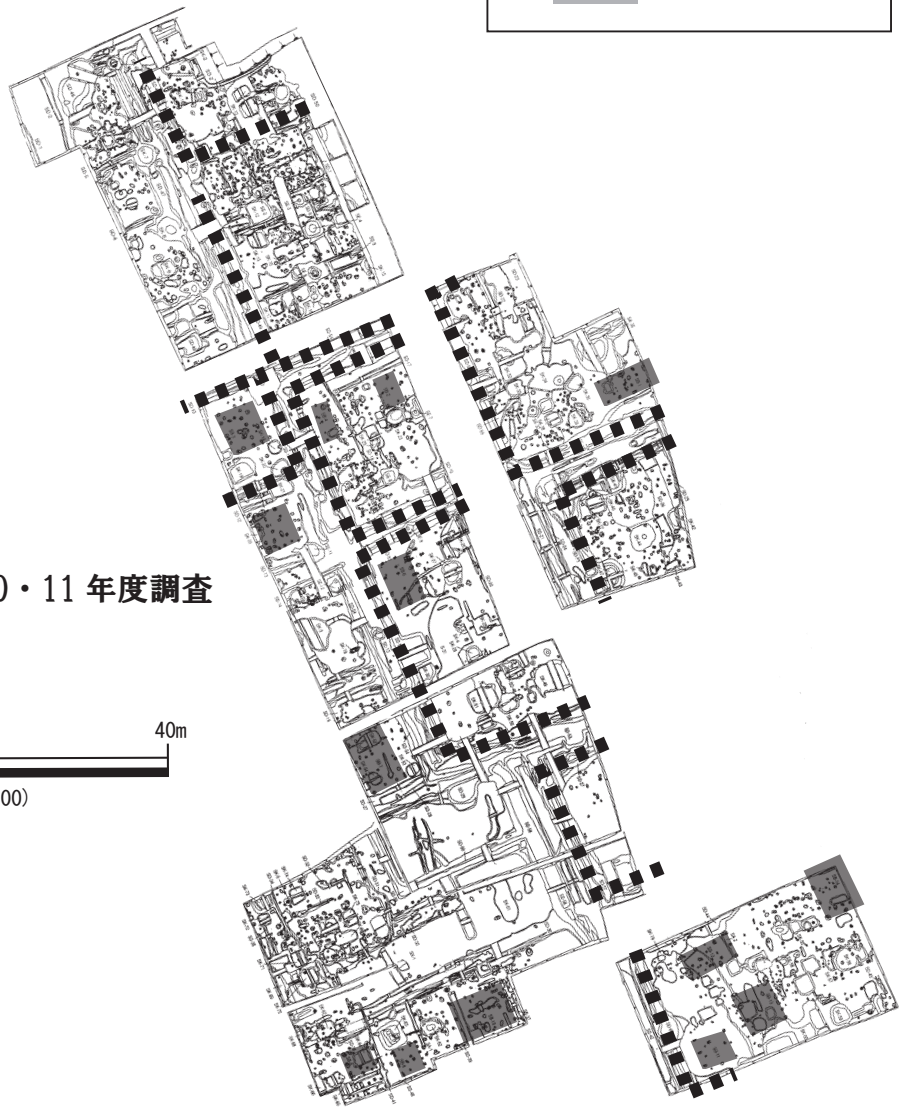


図2 播磨田城遺跡 全体平面図



平成 22 年度調査

■ ■ ■ ■ ■	想定屋敷地割
■	掘立柱建物跡



平成 10・11 年度調査

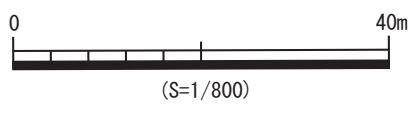


図3 播磨田城遺跡 平成 10・11 年度 / 平成22年度調査
全体平面図

える上で重要な発見と言えるでしょう。

以上をまとめると、当該調査地は、鎌倉時代から室町時代を中心に栄えた集落で、口の字状に巡る溝に囲まれた区画内に、建物などを構築して生活していたことが推測されます。

(2) 播磨田城の所在について

では、今回の調査と冒頭に示した前回の調査を合わせて、当該地周辺の歴史背景について考えてみたいと思います。滋賀県は地名・伝承などをベースに中世城郭の位置を想定する“中世城郭分布調査”を実施しています⁽²⁾。その中で、調査地の北東には「古城」と呼ばれる地名が残っています(図4)。城館跡は、地名がそのまま後世へと残っている場合があり、そこから城館跡を想定している事例も見受けられます。つまり「古城」という地名は、そこが中世の城跡であった可能性を推測できるのです。また、その西側にある現在水田となっている地点には、水田の南東辺に盛土がなされており、これがかつて城を取り囲んだ“土塁”の痕跡(⑧)

であるという説もあります⁽³⁾。以上の推定から、小字「古城」付近に当時の城館があったとすれば、今回の調査地及び平成10・11年度調査地点で発見された集落跡は、城館に伴うものであった可能性があるのです。中世における城館と集落の位置関係については、これまでの研究の中で、両者が接する位置にある場合と、離れて位置する場合がある⁽⁴⁾とされています。現在の調査成果では、前者にあたる空間構成を成していたといえるでしょう。今後の調査の進捗により、さらなる把握が期待されます。



⑥ 掘立柱建物 SB - 1



⑦ ピット群・溝 S202/203

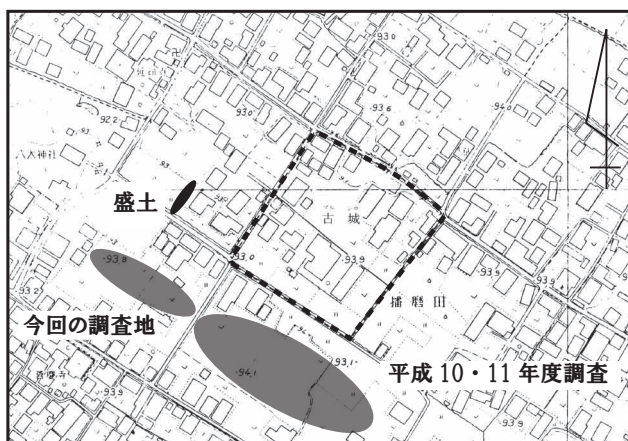


図4 遺跡周辺図 (滋賀県教委 1985 に加筆)



⑧ 現在の盛土の様子 (土塁か?)

● 埋文センター 夏の恒例行事 “親子考古学教室” ●

夏休み恒例の埋文センター親子考古学教室は、今年も7月24日（土）・8月7日（土）・8月22日（土）の計3回で開催いたしました。小学校2年生から6年生まで、7組の親子の参加があり、猛暑の中で、さまざまな古代体験をしていただきました。第1回は、“火起こしと古代食体験”、第2回は“土器作り体験”、第3回は“石包丁作りと穂摘み体験”を実施しました。体験の内容は、稲の収穫から食事など、いずれも古代の生活には欠かせない作業ばかりでしたが、みなさんが想像していた以上にどの作業も難しかったようで、便利な現代と違って古代の生活がいかに大変だったのかを、体験を通して感じていたようです。



埋文センター 秋の特別展

● 「埋蔵文化財センター開館30周年展—服部遺跡^{はっとりいせき}の発見から現在まで」のお知らせ ●

今年度も、10月30日（土）から11月23日（火・祝）にかけて秋の特別展を開催いたします。今年は、埋文センター開館30周年の記念すべき年であることから、その設立のきっかけとなった「服部遺跡」を年間のテーマとしています。そこで秋の特別展では、春の特別展と同様に服部遺跡の出土品を公開いたします。ただし、春の展示とは全く趣向を変えて、ちがった魅力を紹介したいと考えております。守山市の埋蔵文化財の幕開けである「服部遺跡」から出土した貴重な遺物の数々を、この機会にぜひご堪能ください。（木下）

【文献】

- 註1. 守山市教育委員会（2003）『播磨田城遺跡発掘調査報告書』
- 註2. 滋賀県教育委員会・（財）滋賀総合研究所（1985）『滋賀県中世城郭分布調査3』
- 註3. 守山公文書館（2008）『守山城物語（もりやましろものがたり）』
- 註4. 小島道裕（1997）『城と城下一近江戦国誌一』新人物往来社

機関紙「乙貞」は、守山市のホームページ（<http://www.city.moriyama.lg.jp>）からも閲覧できます。